

文縞絵斗　小説家

三年前より書道を始める。2020 年 島田荘司選福山ミステリー文学新人賞受賞。『依存』『葛藤』を講談社より刊行。現在は『SHOSOU』アプリの開発に奮闘中。

島田幸吉　書道家

あきつ会元事務局長として仲田幹一に師事。『幹一書相字典』を刊行。日本絵手紙協会初代事務局長。現在は国際文字文化普及協会理事長として文字文化の普及に尽力。

対決／対談

島田幸吉VS文縞絵斗

デジタルと書を語る

プロローグ（ここに至るまでの経緯）

昨年の秋、文縞氏から以前私が作った『粘葉本和漢朗詠集行成字典』『高野切第三種字典』『幹一書相字典』を利用させてほしいと連絡を受けた。氏はここ二年ほど書道に興味を持ち熱心に学んでいるらしい。学びの足しになるのであればと、もちろん了承した。

半年ほどしてこれらの字典をアプリにしたと、その見本例をみせてくれた。完璧とは言えないが、デジタルには全く縁のない私にはこれからの時代このような学び方も出てくるのだと少々妬ましく思った。

（島田幸吉）

そこで編集部ではさっそく対談を企画することにした。

使い方はあなた次第　可能性は無限大!!

開発中



かんたん仮名文字作成アプリ SHOSOU

仮名文字が読めなくても、書けなくても
パソコン、スマホ、タブレットで作品が作れる！

仮名文字文化をもっと身近に

（司会）文縞さんデジタルで仮名字典を創るというのは大変だったでしょう。なぜこのようなものを創ろうと思ったのですか。

（文縞）書道界では珍しいかも知れませんが、世の中ではそう珍しい事ではないですよ。この程度のことは普通に行われていることです。

（島田）いやいや、書道の世界ではこれは大変な影響を及ぼしますよ。聞いたところによりますと、台湾では漢字にＡＩを利用して、見本があればどんな書風でも作れる研究が進んでいるとか…。仮名ではまだ聞いていませんね。

（文縞）はじめに勘違いされないように、私が開発しているアプリはＡＩではありません。

三年ほど前から、私は書道に興味を持ち勉強を始めました。書道には楷書、行書、草書などがありその上仮名には変体仮名があります。これらをすべてマスターしないと作品が書けません。それぞれにとても便利な字典があるのですが、これを使いこなすのは私には大変なのですよ。

そこで、これらの字典を利用して簡単に作品作りの原稿が書けるようにしたいと思ったのが開発のきっかけです。

（司会）なるほど、経緯はよくわかりました。それでそのアプリはできたのですか？

六万文字以上の文字素材がアプリの中に

（文縞）はい。思ったより時間はかかりましたが、『高野切第三種』『粘葉本和漢朗詠集』をまず取り込んで百人一首を作ってみました。予想通りうまくいきそうなので、『幹一書相字典』も取り込みました。今のところ六万字くらいの漢字や仮名素材が使えます。

（司会）六万字ですか。大変でしたね。それでどんなものが出来たのですか。みせてもらえますか。

（文縞）このアプリをもとに百人一首を作ってみたのが下の作品です。どうですか。

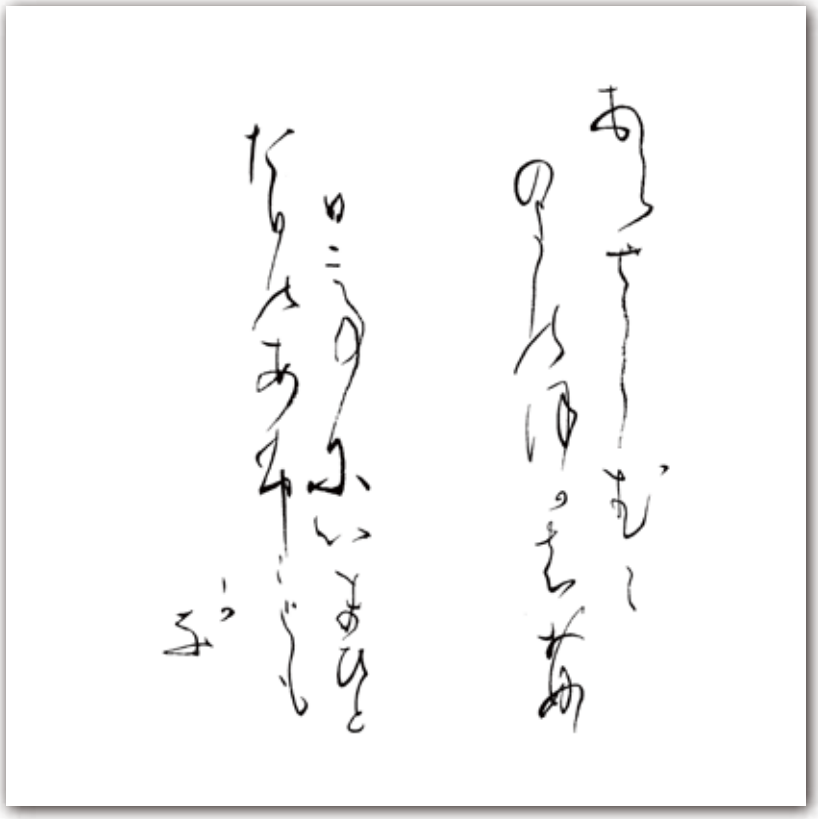


（司会）エー、これパソコンのアプリで作ったのですか。手で書いたのかと思いました。

（文縞）そう言っていただけると嬉しいですね。実はこのアプリはそこが特徴なのです。なんでこんなにハッキリしているかというと使用した原稿が良かったからなのです。

実はこの六万字の原稿は、すべて島田さんが肉筆で書かれたものをデジタル化したものなんです。

作品集や古筆手本からの収集ではこのアプリはできなかったですね。つまり全て島田さんに感謝なのです。



アプリで作成した百人一首

（司会）あら、そうなのですか!!　全て肉筆原稿とは恐れ入りました。

（島田）そこのところは、私はもちろん知っているのですが、なかなか出来栄えがいいですよね。ところでこれは誰がやってもこうなるわけではないのでしょ。

（文縞）
はい。これを扱うにはそれなりの書道の基礎知識は必要なのですが、その人の感性が大切ですから、書道の知識がない人が使ったらまた違った面白いものができるかもしれません。挑戦してくれる人いませんかね。

（島田）
百人一首を作品にするには「チラシ」や「構成」、「文字の組み合わせ」などが大事だから、書の力が相当ないと、ここにある百人一首のような作品を作るのは無理でしょう。ただ、書の経験が無くても、文章を書くとか、短冊のような作品作りには効果を発揮するかも知れませんね。

アプリ名『SHOSOU』に込めた想い

（司会）（文縞）
このアプリに名前は付けたのですか？

（文縞）
正式にはこれからですが、『SHOSOU』（しょそう）にしようかと思っています。

（司会）
「SHOSOU」？「しょそう」？　ですか。どんな意味があるのですか？

（文縞）
「SHO」は「書」です。「SOU」は相、創、想、奏、などの意味を込めています。

（島田）
ああ、なるほど良く分かりました。目的にかなったとてもいい命名ですね。



IT・AIの時代にアナログで挑戦する意義

（司会）
先ほどアプリを作る経緯は簡単に聞かせていただきましたが、中身についてもう少し具体的に聞かせていただけますか。

（文縞）
書道というのはとにかく奥が深いのですよ。ですから始めても何年間かは、コツコツと基礎を学ばないといけない。せっかく勉強しているのだから、百人一首も書いてみたいし色紙や条幅も書いてみたい。先生がいれば手本をお願いできるのかも知れないが、先生がいないとそれも出来ない。書道を習っている知人にそんな話をしたら、最初から百人一首など書けないよ。最低五年はしっかり基礎を学ばないと、と言われた。仕方がないので当時は、高野切第三種や粘葉本和漢朗詠集などの古典を臨書していました。でもそれだけでは書道も飽きてしまう。

（島田）
本当は自分の好きな百人一首や和歌をかいて見たかったので、古典や字典から文字を集めて切り貼りして作ってみたのですが、全く能率が上がらない。今のIT・AIの時代に何とアナログな事だろうと思い始めたのです。

（司会）
私らの時代では何年間も基礎を学ぶ、その勉強法が当たり前だったのですがね。

そこで、このアプリを作ろうと思ったのですね。実にいいことじゃないですか。ここまで出来たのを見て島田さんどう思われますか。

『SHOSOU』の機能について

（島田）

いやー、実に良くできていますよ。今の時代普通の人が一寸工夫するとこういうものができちゃうのですね。

このアプリを使うと、書歴二年の文縞さんがこんな立派な百人一首の原稿を作れてしまうのですね。多少未完成なところはありますがちょっと驚いています。

ところで、今回私が貸してあげたデーターは三種類でしたが、まだまだ沢山の古筆類がある。それらを追加したらもっと違うものが出来るということなのかな？

（文縞）

はい。データーが多いほど良いものが出来るのですが、複雑になり過ぎて使い勝手が悪くなる場合もあります。

例えば、『高野切第三種』と『関戸本古今集』を一緒にすると、これを使いこなすのに、より高い能力が必要になります。『高野切第三種』だけ、『関戸本古今集』だけの方が使いやすいという人もでてきます。



文字の種類ごとや「一字」「連綿」などで検索できる仕様となっている。

学習法の一つとしてアプリの活用

（司会）

とても便利なアプリだということは分かりましたが、書道の学習にこのようなアプリが導入されると学習の仕方が変わってくるかも知れませんが、問題になるようなことはありませんか。

（文縞）

私はこのようなアプリは、学習法の一つだから個人の選択ですればいいと思っています。私自身もまだこの方法で結果を出しているわけではないので、人様に勧めようとは思っていません。

あくまでも自分が作品を作るにあたっての下書き原稿を作る為のものです。

（島田）

そうだね。私も文縞さんの考えの通りだと思います。

今回の百人一首の原稿を見せていただくと、余りにも良くできている。これだけの完成度は二年や三年ではとてもできるものじゃない。私でさえ、ちょっと妬ましくおもってしまう。このようなアプリを使える人と使えない人の差が余りにも大きすぎる。

でも、それを言うのは、我々の年代だけかもしれない。

これからの人達は普通にこういうアプリを使いこなすわけだから…。

（司会）

私にはこのアプリがどの程度素晴らしいのかよく理解できませんでしたが、島田さんがヤキモチをやくほどなのですね。

（島田）

そうですね。例えば将棋の世界でたとえると、将棋をたった二年ほど習った人が、名人戦や、王将戦を戦えるほどの能力を手にしたということかな。ただ、これはあくまでも原稿が出来たということで、作品が出来たわけではないけどね。

（司会）

それって、すごい事ですよね。そんなすごいお手本を手にしたということでしょう。それを清書すればいいわけでしょ。

（島田）

あー、ちょっと誤解されそう。そんないい原稿が出来るのは、それを、使いこなす能力があるひとだけです。ＡＩではないので、自動的に出来るわけではありません。

でも、アプリなので、資料はたくさんある。その中から自分で選んで、自分で構成、つまり組み立てるわけです。そうですよね、文縞さん。

（文縞）

はい。その通りです。実は、百人一首などの作品作りは、偉い先生方は別として、一般的には、目的に合った資料を揃えないといけない。これが大変なのです。このアプリは、資料を一堂にまとめた書庫（字典）と考えてください。

つまり資料集めをしなくてもいいわけですから、その時間が節約できるわけです。その上、自分では集められないような資料が目の前にありますから、その中から選べばいい。自分の中に理想像があれば、それに近づけていけばいいのです。

アプリを使った『百人一首』制作の様子を紹介

（司会）

話を聞いていて、少しわかってきましたが、実際に百人一首を作るところを具体的に解説していただくことはできませんか。それって企業秘密ですか。

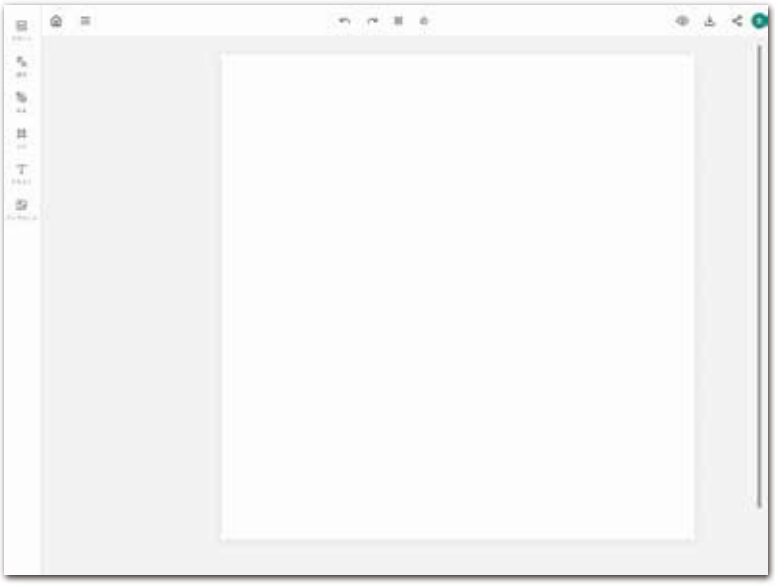
（文縞）

いいですよ。

それでは百人一首の第二番

「春すぎて夏来にけらし白妙の衣ほすてふ天の香久山」

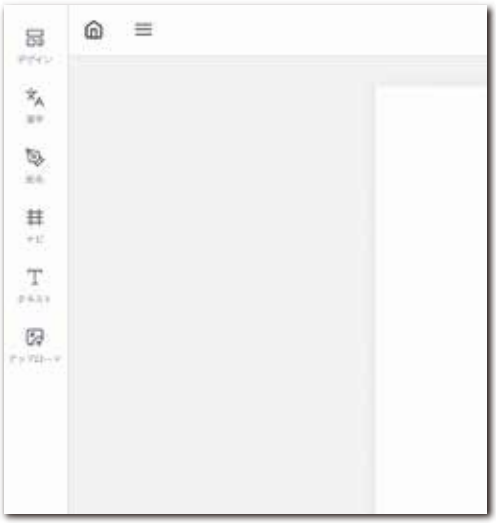
の句を実際にアプリで作成しながら解説しましょう。



アプリのトップ画面。無駄なコンテンツをおかずシンプルな仕様を心がけている。

まずは冒頭部の「春過ぎて」について作成しましょう。

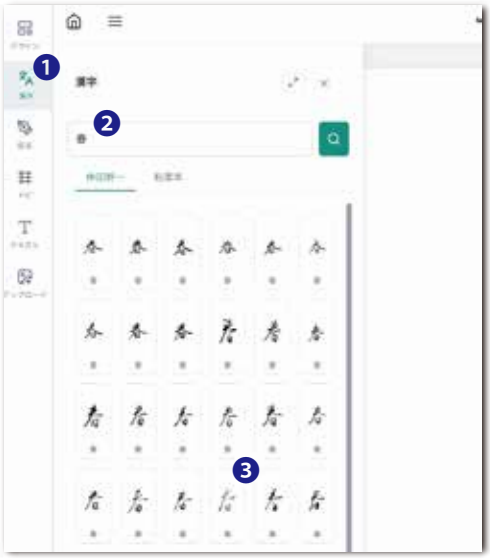
「春」を漢字で「過ぎて」は仮名の連綿を使って作成することにします。



❶❷❶［漢字］ツールを選択。

❷検索窓に「春」と入力。

❸候補の文字が表示されるので希望のものを選択し希望の位置にドラッグする。



配置後にサイズを調整する。

後からでも変更可能なのでまずは適当に。



続いて「過ぎて」の部分を連綿で。

❶［仮名］ツールを選択。

❷検索窓に「すきて」とひらがなで入力。

❸［連綿］を選択。

❹候補の文字が表示されるので希望のものを選択し希望の位置にドラッグする。



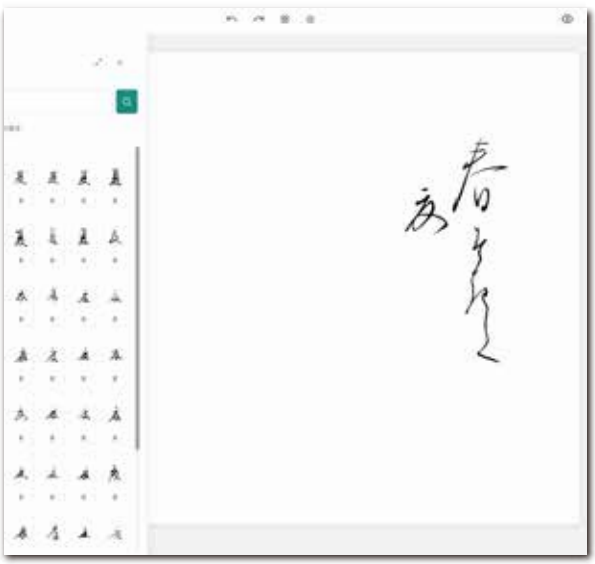
先に配置した「春」との繋がりやバランスを考え配置後、微調整する。

「す（春）き（起）て」と変体仮名が読めなくても利用できるのがアプリの特徴。



この要領でどんどん配置していく。

デザイン感覚で配置できるので操作は簡単。



上の句「春すぎて夏来にけらし白妙の」まで入力終了。続けて下の句へ。



❶［デザイン］ツールで好みの背景を選択。
❷図柄を選択すると背景が変化する。



制作時間約二十分。完成した作品がこちら。

「春すぎて夏きにけらししろたへのころもほすてふあまの香具山
（春）（起）（希）（多）（遷）（能）（歌）（阿）（万）（能）



← こちらの QR コードより実際の制作風景を動画で閲覧できます。

アプリを通じて書道に興味を持ってもらいたい

（司会）

有難うございました。この『SHOSOU』を使うと百人一首や仮名文字の原稿が極めて簡単に作ることが出来るのは分かりました。

しかし、原稿ではなく、できたものをそのまま実用として使うことも出来るのではないですか？

（文縞）

私は、作品作りの補助として使おうと思っていましたが、日常の中で使えるのであれば、それはそれで便利なのかもしれませんね。

（島田）

今、書道人口は激減しています。今年十一月から十二月ごろにユネスコの無形文化遺産に「書道」が登録される予定ですが、これを契機に書道人口が増えることを期待しています。

こういうアプリを利用して書道に関心を持ってもらい、実際に書ける人が増えるといいですね。今は変体仮名など読める人は極めて少ないのですが、こういうアプリを使えば、そんなこともできますね。

（司会）

島田さんは、前向きに考えてくれていますが、実際に書道をされている方はどうなのでしょう。

（島田）

そこについてはまた話は別です。今のＡＩやＩＴの時代を我々の世代はなかなか理解できない。四、五十年かけて習得した技術を二、三年学んだ人に越されてしまうかもしれない。

（文縞）

ちょっとせこいかもしれないが、文縞さんに字典の利用を断ればよかったなどと考えてしまうこともある。私の年代ではそんな人が大勢いるのではないかと。そんな人たちには申し訳ない気持ちになってしまいます。

でも、実際は遠からず誰かが作るわけですけれどね。文縞さんが作ったのはアプリだけれど、そのうちＡＩを利用してロボットが直接書いてしまう時代が来るでしょう。そんなことを考えると、もっと大きな考え方をしなければならないのかもしれませんね。

（島田）

実は、私も同じようなことを考えていました。

こういうアプリを使って今まで書道に関心のなかった人が、書道に興味をもってもらえたらいいなとも思います。

アナログVSデジタル『百人一首　書道対決』

（島田）

一つ提案があるのですが、二人で『百人一首 書道対決』をしませんか。

（文縞）

え！　それってどういうことですか。

（島田）

文縞さんはこの『SHOSOU』のアプリを利用して、百人一首を書く。実は私が対決したいのは『SHOSOU』そのものな

のです。ですから文縞さんは、アプリで作った原稿を、私は今までのやりかたで、同じ百人一首を書きます。

簡単に言うと、アナログ対デジタル対決ということになりますか。具体的な条件は、『百人一首を色紙に書く』というのはどうでしょう。

それともう一つ。文縞さんには作品として、清書したものを半数は出してほしい。

（島田）面白い話ですが、この対決は島田さんの勝ちですよ。だってこのアプリの資料は全部島田さんが書いたわけでしょう。

（文縞）いやいや、字典を作ったのは三十代のことで、今の私の頭と腕にどのくらいの力が残っているかは全く自信がないですよ。でも私としては敗けるわけにはいかない。

（島田）なるほど。私の手元にあるのは六万字ですからね。ちょっと自信がでてきました。是非やりましょう。時間が長くなると島田さんが有利になりますから、今年の十二月でどうでしょう？

（文縞）おお、そういう作戦できましたか。ちょっと時間が少ないけど、受けて立ちましょう。

（司会）これは、これは。思わぬ方向に話が展開しましたね。それなら私が仲立ちをして具体的な課題を決めましょう。

百人一首の『一番から三十番』までを色紙の大きさで書くというのでどうですか。展示期間は十二月十四日（月）から一週間、会場は大崎ウエストギャラリー。

（島田）はい。いいですよ。

（文縞）いいですよ。

では、私からも提案を一つ。折角なので短歌だけでなく、俳句を三十句、課題に追加しませんか。この際、勉強ですから試してみたいのです。形式はハガキの大きさで。

（島田）おお、意欲的ですね。いいでしょう。

（司会）いいところに落ち着きましたね。時間がありませんが、お二人とも頑張ってください。

展覧会

アナログ VS デジタル

百人一首を書く

会期：2026年12月14日（月）〜21日（月）　11時〜16時

会場：大崎ウエストギャラリー